

# 動作主体を ニ格で表示した 可能文の使用実態と意味 ——新聞・知恵袋・書籍の比較を通して

阿部由子

## ◆要旨

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の検索ツール『中納言』を用いて、出版・新聞、特定目的・Yahoo!知恵袋、出版・書籍（以下、新聞、知恵袋、書籍と略す）の3つのレジスターでの動作主体をニ格で表示した可能文（以下、ニ格表示可能文とする）の使用実態を調査した。その結果、ニ格表示可能文は書籍のジャンルの1つである文学で最もよく使用されるが、コーパス全体での使用頻度は高くなく、使用される動詞もいくつか限定されていることが示された。用例の分析から対比、疑問・反語のほか、書き手の判断を示す文と動作主体の立場からの判断を示す文があることがわかった。この結果より、ニ格表示可能文は中上級の学習者の必要に応じて導入することを提案する。

## ◆キーワード

ニ格表示可能文、出現頻度、レジスターの比較、文学、判断を示す文

## ◆ABSTRACT

This paper investigates the actual use of Japanese potential sentences marked by the case particle 'ni'. Using "Chunagon", which is the search tool for "Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese," the following three registers were compared: Publication-Newspaper, Specific Purpose-Yahoo! Chiebukuro, and Publication-Books. The result shows that potential sentences marked by the particle 'ni' are used best in literature, which is a genre of Publication-Books, but that their frequency in the whole corpus is not high and the used potential verbs are restrictive. By the analysis of examples, I find that this construction is used not only to express comparison, a question, and a rhetorical question but also to indicate the judgment of a writer or an agent. I propose that this construction should be introduced for intermediate and advanced learners according to their learning needs.

## ◆KEY WORDS

potential sentences marked by the case particle 'ni', frequency, comparison among registers, literature, a sentence indicating the judgment

## The Actual Use and the Meaning of Japanese Potential Sentences Marked by the Case Particle 'Ni' Comparison among Newspapers, Chiebukuro, and Books

YOSHIKO ABE

## 1 はじめに

中上級になると動作主体をニ格で表示した可能文（以下、ニ格表示可能文とする）に関する誤用が時折みられるが、筆者の知る限りこの構文を学習項目として取り上げている日本語学習テキストはないように思われる。そこでコーパスにおけるニ格表示可能文の使用実態を調査し、日本語教育に還元できることを探ってみたいと思う。コーパスのレジスターやジャンル等によって構文の出現頻度に違いが生じている可能性を予想し、国立国語研究所による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJと呼ぶ）の3つのレジスターにおけるニ格表示可能文の使用実態の差異を検索ツール『中納言』を用いて比較した。

## 2 先行研究

可能文の動作主体はガ格またはニ格で表示されるが、動作主体がニ格の場合、動詞の目的語にはガ格が用いられる（寺村1982, 市川1991, 渋谷1993）。

渋谷（1993）は可能文を実現系可能と潜在系可能に分け、さらに制約条件としてそれぞれを心情可能、能力可能、内的条件可能、外的条件可能、外的強制条件可能（自発）の5つの条件可能に分けた。ニ格表示可能文はこれらの条件可能のうち心情可能、能力可能で成立すると渋谷は指摘した。庵ほか（2000）は潜在的可能を一時的、恒常的、恒常的+評価の3つに分け、ニ格表示可能文は人などの潜在的な能力を表す一時的可能に用いられ、恒常的可能の場合、動作主体は存在するが表面には表れないと述べた。

ニ格表示可能文ではニ格に「は」を重ねて主題化することで文が対比的な意味を帯び（市川1991, 渋谷1993, 清水2002）、有標化・前景化される（渋谷1993）。また、心情的・能力的に不可能である場合には比較的使いやすい（庵ほか2000）、否定文で使われることが多い（庵ほか2000, 清水2002）、ニ格の動作主体は人間以外だと不自然になる（渋谷1993）、動作主体の能力をみくびるようなニュアンスが生じることがある（渋谷1993）ことも指摘されている。

コーパスを用いた先行研究としては、田村（1997）が文庫本の小説185冊を

用いて可能文で用いられる助詞とニ格表示可能文で使われる動詞の調査を、また小林（2012）が電子図書館「青空文庫」のデータを利用してニ格表示可能文の調査をおこなっている。

## 3 BCCWJの新聞、知恵袋、書籍のデータ分析

### 3.1 方法

ニ格表示可能文は心情可能、能力可能で用いられるため（渋谷1993, 庵ほか2000）、感情の表れやすい文章や話し言葉に使われる可能性が高いと考えた。

そこでBCCWJの検索ツール『中納言』を使用して、堅い書き言葉である出版・新聞と出版・書籍、話し言葉に近いニュアンスで書かれた特定目的・Yahoo!知恵袋の3レジスター間の出現数を比較した。BCCWJの短単位語彙表より出現頻度上位2000<sup>[註1]</sup>の語彙から抽出した動詞について、用例を収集した。

### 3.2 リサーチクエスチョン

- (1) ニ格表示可能文では、どんな動詞の使用頻度が高いか。
- (2) 新聞、知恵袋、書籍で、ニ格表示可能文の使用頻度比率は異なるか。
- (3) ニ格表示可能文は否定の意味で使われることが多いか。
- (4) ニ格の動作主体にはどんなものが用いられているか。

### 3.3 結果

まず、ニ格表示可能文で出現数の多かった動詞の語彙素について可能形の出現数とガ格表示の可能形、およびニ格表示の可能形がどの程度用いられているかを比較した。表1よりガ格表示文の方が多いが、ニ格表示文も極端に少ないわけではないことがわかる。

リサーチクエスチョン（1）について述べると、ニ格表示可能文は31の動詞で使われていたが、実質的には上位10の動詞に偏って使用されている（表2）<sup>[註2]</sup>。ニ格表示可能文の用例数が際立って多い「出来る」には「漢語+サ変動詞」の用例も含まれるため、表3でその内訳を示した。

表1 可能形の出現数と動作主体表示方法別出現数

出現数 語彙素	可能形の 出現数	カ格表示 の可能形	ニ格表示 の可能形
出来る	88788	5706	909
信ずる	949	125	27
考える	5711	4	25
言う	10335	90	17
読む	782	70	13
書く	566	30	10
止める	414	32	10

表2 ニ格表示可能形の語彙素別出現数

語彙素	ニ格表示の 可能形出現数	語彙素	ニ格表示の 可能形出現数
為る	909	使う	9
信ずる	27	扱う	8
考える	25	作る	6
言う	17	答える	6
読む	13	払う	6
切る	10	忘れる	5
書く	10	越える	5
止める	10	殺す	5

出現数4以下の動詞は省略

表3 ニ格表示可能文における「出来る」の出現数内訳

内訳	出現数
「出来る」全体	909
出来る	609
理解できる	141
想像できる	16
真似できる	13
納得できる	9
我慢できる	5
予測できる	5

表4 書籍のジャンル別総語数とニ格表示可能形の出現数

ジャンル	ジャンルの 総語数	ニ格表示 可能形の数	ジャンル	ジャンルの 総語数	ニ格表示 可能形の数
社会科学	7,359,793	149	哲学	1,507,725	68
文学	6,802,589	377	産業	1,234,687	19
自然科学	2,701,476	44	総記	772,760	16
歴史	2,520,070	48	言語	492,975	10
技術工学	2,342,557	40	分類なし	1,108,893	25
芸術美術	1,708,758	58	合計	28,552,283	854

表2,3をまとめると出現頻度が高い動詞は、出来る(613例)、理解できる(141例)、信ずる(27例)、考える(23例)、真似できる(17例)、想像できる(16例)、言う(15例)である。「理解できる」の出現頻度が高いことから、可能動詞ではないが同じ意味を持つ「分かる」についても調査したところ、新聞で18例、知恵袋で303例、書籍で1122例が出現していた。ただし「分かる」は可能動詞ではないため、今回のデータには含めないことにする。

リサーチクエスション(2)に答えるためにカイ二乗検定を行ったところ、3レジスター間の出現比率に有意差があるという結果が得られ( $\chi^2(2)=16.496, p<.01$ )、多重比較で書籍>知恵袋>新聞であることがわかった(知恵袋>新聞 $r=$

表5 ニ格表示可能文の肯定・否定別出現数

	肯定	否定	疑問・反語	合計
新聞	8	12	0	20
知恵袋	70	161	25	256
書籍	349	484	27	861
合計	427	657	52	1136

表6 ニ格の表示方法と肯定・否定別出現数

表示方法	出現数		
	肯定	否定	疑問・反語
に	230	69	34
には	50	481	7
にも	82	56	10
にしか	0	47	0
にでも	59	4	1
にのみ	2	0	0
にだって	8	1	0
にすら	0	1	0

表7 人称別動作主体の出現数

	一人称	二人称	三人称	合計
合計	497	56	587	1140

5.041,  $p<.05$ ; 書籍>知恵袋 $r=6.812, p<.01$ ; 書籍>新聞 $r=10.193, p<.01$ )。

書籍ではBCCWJのジャンル別に出現数を調べたところ、表4の通り文学での使用頻度は高いのに対し、自然科学、技術工学、産業では低いことがわかる。そこで新聞、知恵袋、文学以外の書籍の3グループで出現比率の差を検定したところ有意差が認められた( $\chi^2(2)=6.850, p<.05$ )が、多重比較で知恵袋と文学以外の書籍間に差はなく、また文学以外の書籍と新聞間の差は有意傾向であった(知恵袋、文学以外の書籍 $r=2.659, ns$ ; 知恵袋>新聞、 $r=5.041, p<.05$ ; 文学以外の書籍>新聞、 $r=2.894, .05<p<.10$ )。この結果からニ格表示可能文の出現頻度は文学で有意に高いことが示された。

リサーチクエスション(3)について調べるために、ニ格表示可能文が肯定か否定かを判定した。判定の際に可能動詞の活用形のみ注目すると、可能動詞は肯定形だが文全体としては否定の意味を示す用例で判定に問題が生じてしまう。そこで、ここでは「文全体として可能形の動詞の意味を否定しているものを否定」と定義する。二重否定は肯定と考え、文末のモダリティは考慮に入れない。一つの文に二つの可能動詞が出現する場合は、動詞の意味に応じて肯定1と否定1のようにそれぞれ一つずつカウントした。表5の結果をカイ二乗検定にかけたところ有意差が認められ( $\chi^2(4)=30.590, p<.01$ )、多重比較で否定>肯定>疑問・反語であることが示された。

ニ格と重ねて使われる助詞に注目してニ格の表示方法別に出現数を数えたと

ころ(表6)、「～には」は否定が際立って多く、対比の意味を含意した用例がほとんどだった。「～にも」では可能であると強調する文章が目立った。動作主体の能力に書き手が疑問を持つ場合には、疑問文や反語表現が使用されていた。

リサーチクエスチョン(4)については、表7に示す通り半数近くが一人称の動作主体で、三人称では人名が117例(うち88例が文学)にのぼっていた。ニ格の動作主体は人間以外だと不自然になる(渋谷1993)と指摘されていたが、非有情物(人の集団17例<sup>[註3]</sup>、動物6例、人体の一部5例、事物5例、国名2例)が動作主体になる場合、これらを能動的なものとして扱っている。また渋谷(1993)の指摘の通り動作主体の能力をみくびるようなニュアンスが生じる用例が見られた一方で、動作主体の能力をプラス評価したものもあった。次節ではこの点について述べたい。

### 3.4 ニ格表示可能文の意味

- (1) もちろん、素人にできる技ではありません。(知恵袋)
- (2) 高い能力とやる気のある皆さんにできないわけがない、ということである。(書籍・社会科学『大前研一のアントレプレナー育成講座』)
- (3) 適当に処分すればいいようなものですが、これが私にはできません。(書籍・産業『駅前不動産奮闘記』)
- (4) 己のふがいなさがなんとも悔しかったが、圭一にできることと言ったら、兄をなぐさめるだけだった。(書籍・文学『父からの手紙』)

渋谷(1993)は、(1)のように動作主体の能力をみくびるニュアンスが生じる場合があると指摘していた。その反対に動作主体の能力をプラス評価している(2)のような用例では、動作主体の能力に対する書き手の評価が示されている。

しかしすべてのニ格表示可能文にこの指摘が当てはまるわけではない。ニ格はしばしば複合格助詞の「にとって」と交代可能であるが、そうした場合ニ格は「その場所から見て」という意味で使われ、動作主体の存在場所からの判断を表すと受け取ることができる(清水2002)。ニ格動作主体が一人称で書き手と動作主体が同一人物である場合には、(3)のように自身が可能または不可能なことについて述べている。文学などで書き手が描写する場合には(4)のよう

に動作主体の立場から事態が可能かどうかについての心情や状況について述べる文になっている。

杉本(2003)は「にとって」を使用した文には、「客観的な事実から導き出され得る判断」を表す話し手判断主体タイプと「内的な感情、感覚を表している」句判断主体タイプの2つがあると述べているが、ニ格表示可能文でも同様に、動作主体の判断を表す用例と書き手の評価を表す用例とがあると考えられる。

## 4 おわりに

ニ格表示可能文の使用実態をBCCWJの3つのレジスターで調査したところ、レジスター間の差は重要ではないが、書籍の1ジャンルである文学で最もよく使用されていることが示された。本稿の内容をまとめると、(1)ニ格表示可能文で用いられる動詞は限定されている(2)特に文学での使用頻度が高い(3)可能動詞の意味を否定した文で使われることが多い(4)ニ格の動作主体のほとんどは人間であるが非有情物が用いられることもある(5)「～には」で表示された文は文全体で否定の意味であることが多く、ほとんどの場合、対比の意味で使われる(6)動作主体の能力に疑問がある場合には、疑問文や反語で用いられる(7)書き手の判断や評価を示す文と、動作主体の立場から可能かどうかについての心情や状況について述べる文がある、ことがわかった。

ニ格表示可能文は全体での使用頻度が低いため初級段階での指導は必要ないと思われるが、中上級の学習者には学習者のニーズに応じて指導する必要があるだろう。この構文は使用される動詞が限られているため、指導する場合には、どんな動詞でも入れ替え可能な文法項目として導入するというよりも、用例の多い動詞を提示しながら表現として紹介する方法を提案したい。

〈早稲田大学〉

## 注

- [注1] …… BCCWJの使用頻度上位2000語の累積出現数で、コーパス全体の81.6%をカバーしている。
- [注2] …… 表1の作成にあたって、語彙素の表記法はBCCWJの短単位表記に倣った。また「感じられる」「思える」の自発、可能の判定については、小山田ほか(2012)の判断基準を参考にしてカウントした。
- [注3] …… 「人の集団」に分類したものは、企業、他社、行政、民間などである。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子(1991)「可能動詞の助詞に関する一考察」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6, pp.1-17. 筑波大学
- 小山田由紀・柏野和佳子・前川喜久雄(2012)「助動詞レル・ラレルへの意味アノテーション作業経過報告」『第2回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』pp.59-68. 国立国語研究所
- 国立国語研究所「短単位語彙表データ：現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表」[http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/freq-list.html](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html) (2014年6月20日取得)
- 小林幸江(2012)「能力の主体を表す「ニ」の意味用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集38』pp.73-87. 東京外国語大学
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊. 大阪大学
- 清水孝司(2002)「「～に(は)～が可能形」の構文をめぐって」『日本語・日本文化研究』12, pp.127-138. 大阪外国語大学
- 杉本武(2003)「複合格助詞「にとって」について」『文藝言語研究 言語篇』44, pp.79-100. 筑波大学
- 田村泰男(1997)「現代日本語の可能文における目的語マーカー「が」「を」について(2)―五段動詞・一段動詞を述語とする場合を中心に」『広島大学留学生センター紀要』7, pp.13-26. 広島大学
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版